

寅彦の「藤棚の蔭から」(第十七話) 小註

大森一彦

寺田寅彦の晩年の作品に、「藤棚の蔭から」と題する全十九話から成る連作形式の随筆がある(初出:「中央公論」1934年9月号)。日常周辺に取材し、クールな観察と含蓄に富む感想を述べたもので、寅彦随筆の魅力あふれる小品(群)である。各篇のテーマは独立しており、タイトルはなく番号がついているだけである。本稿はその中の一作品の、さらに一小部分の、これまで不問にされていた事柄につき若干の調査を試み、見出されたことの概要を記し、読者のご参考に供しようとするものである。

その〈十七〉は、「野中兼山の土木工学者としての逸話を二つだけ記憶している」と書き出される。その一つは、兼山の、オリジナルな方法をもってする水準測量の話であるが、ここではふれない。本稿で取り上げるのは、後段にあるその次の話で、まず原文を引く(『寺田寅彦随筆集』第4巻.岩波文庫1999〔第66刷〕.p.283)。

「もう一つは浦戸港の入り口に近いある岩礁を決して破壊してはいけない、これを取ると港口が埋没すると教えたことである。しかるに明治年間ある知事の時代に、たぶん机の上の学問しか知らないいわゆる技師の建言によってであろう、この礁(かくれいわ)が汽船の出入りの邪魔になると言っただいナマイトで破碎されてしまった。するとたちまちどこからともなく砂が港口に押し寄せて来て始末がつかなくなった。故工学博士広井勇氏が大学紀要に出した論文の中にこのときの知事のことを“a governor less wise than Kenzan”としてあったように記憶する。じつに巧妙な措辞であると思う」(以下略)。

私が調べたのは、この文の、下から2~3行目にある人名、文献名(下線部分)と、それに続く英文フレーズである。

1. 故工学博士広井勇氏

これは人名事典により容易に調べがつく。「ひろい・いさむ* [広井勇] (1862-1928) 明治一昭和時代前期の土木工学者. 文久2年9月2日生まれ. 開拓使御用掛などをへて、欧米に留学. 明治22年母校札幌農学校の教授となり、北海道庁技師をかねた. 32年東京帝大教授. 土木学会会長. 築港, 橋梁技術における日本土木界の草分け的存在で、道内の鉄道建設や小樽などの築港につくした. 昭和3年10月1日死去. 67歳. 土佐(高知県)出身」(『講談社日本人名大辞典』. 2001. p. 1583). * 〈いさみ〉とする辞典もある. 彼の英文著書には〈Isami Hiroi〉とある。

幸いな事に、この人については、信頼性の高いよい伝記がある。(1)故広井工学博士記念事業会編『工学博士広井勇伝』(エ事画報社.1930.236p), (2)高崎哲郎著『評伝 山に向かいて目を挙ぐ一工学博士・広井勇(いさみ)の生涯』(鹿島出版会.2003.281p)である。この2書により、広井の生涯と事業の詳細を知ることが出来る。とくに(1)には、詳細な著述目録とその解説(p.157~185)があり、年譜(p.203~218)とともに有効である。

2. 大学紀要

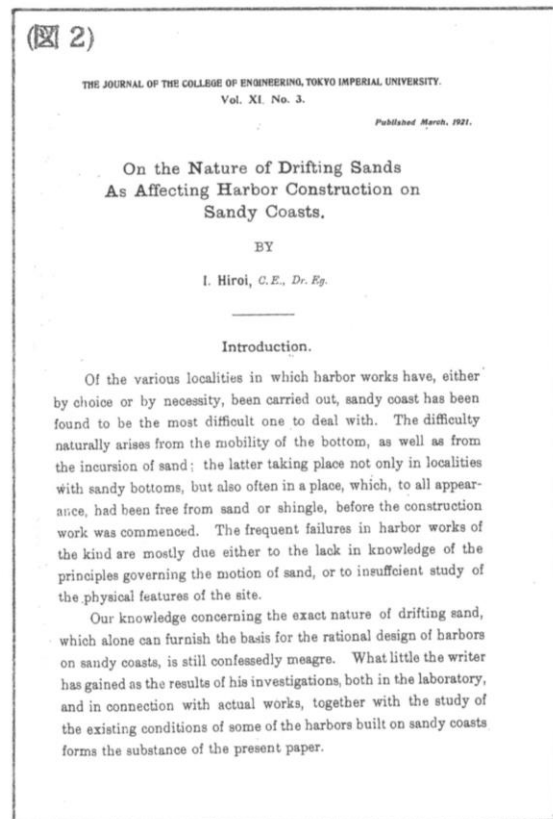
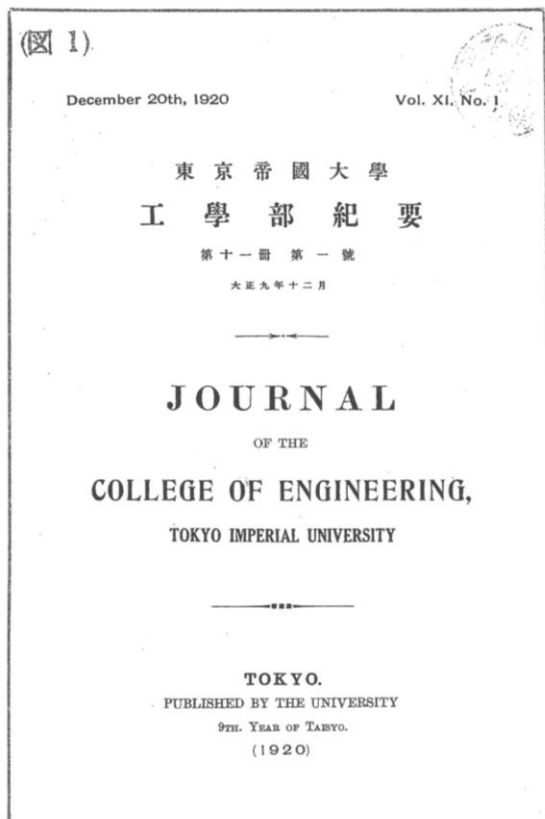
1898年に創刊された「東京帝國大学工學部紀要」をさす(図1)。はじめ「東京帝國大学紀要.工科」と称したが、のち改題された。掲載論文のほとんどが欧文で書かれており、欧文誌名 Journal of the College of Engineering, Tokyo Imperial University を併せ持つ。

3. 大学紀要に出した論文

1921年3月発行の第11冊第3号, p.47~82(+付図4枚)に掲載された:

On the Nature of Drifting Sands As Affecting Harbor Construction on Sandy Coasts.
[砂浜海岸上の築港に影響する漂砂の性質について].

と題する英文論文である(図2)。広井は1919年に退官しているので、これが発表されたのは退官2年後のことであった。これはどういう内容の論文であるか。タイトルによりおよそその事は分るが、上記(1)の『広井勇伝』に詳しい解説があるのでそれを引用する。



「砂浜に於ける築港工事の困難は漂砂にあるとなし、漂砂の移動状態、波の方向と砂浜の方向、砂粒の比重等の関係を一々実験観察を以て説明し、砂の移動防止堤の方向及距離に就て記載し、実際砂浜に於ける築港工事を内外諸港の实例に徴して詳述し、最後に結論を述べ、港口の深度幅員及其の方向と漂砂移動方向に対する傾き、漂砂の来る側を被護すべき事、港口の傾斜等の条件を掲記せるものである」(p. 175) .

4. 英文フレーズの出現箇所

“Arrestation of Drifting Sands” [漂砂の抑制] という章があり (p. 60~63), その实例として野中兼山によって着工され完成した高知県の手結 (てい) 港の築港の歴史が記されている. 兼山のことを “an eminent engineer and statesman” と呼んでおり, その文中にこの言葉が出て来る. ただし寅彦の引用 (“a governor less wise than Kenzan”) とは少し異なり, 原文は, “a certain governor of the land, less wise than Kenzan”) とある.

はるか昔, 広井論文を一読した時, 文中のこの表現に, 語感鋭く注意を向けた着眼と, それをいま想起しつつ, 「じつに巧妙な措辞であると思う」と評し, さりげなく一編を閉じる寅彦の手際は見事である. 原資料のこのフレーズを含むページを加工して下に示そう.

On a shingle beach, with the direction of incident wave not greatly departing from the normal to the shore-line, a single groin carried to sufficient depth would suffice to arrest the progressive motion, a state of equilibrium becoming established when stopped by the barrier. An interesting case, illustrative of this fact, was the partial destruction of a small fishery harbor at Tei, in the Kochi Prefecture, built, some 200 years ago, by an eminent engineer and statesman Kenzan Nonaka. The harbor, as shown in Fig. 4, Pl. I, consists of nothing more than a basin communicating with the sea through a short canal, which is protected at its outer end with stone piers and a groin. The groin, which as constructed had extended as shown dotted, and held in check, as it were, the shingle beach lying to the south of the pier. The basin continued to be of use for fishing crafts without any trouble, beside occasional dredging of silt and sand, until within recent years, when a certain governor of the land, less wise than Kenzan, seeing no reason why the groin should be projecting so far out, and that the piers be of unequal lengths, ordered them to be trimmed, as shown in full lines, and had the stones used for other purposes. The shortened groin, no longer covering the full width of the zone of shingles, allowed the latter to be drifted into the canal and the basin, completely filling them up to the brim in the course of less than a year. The groin and the pier have since been extended, and the basin has been restored to its former state.

その他この作品で註をつけるとすれば、さしずめ、俎上に載せられた「ある知事」あるいは「このときの知事」と書かれている人物の実名であろう。これについては、すでに山田一郎氏が調べて書いている。以下にその成果を引用させていただく。

5. このときの知事

「この知事は田辺良顕と言う人で、初め県令、後に知事として明治十六年から二十一年まで在職した。四国新道の開設に大きな功績を残したが、同時に浦戸港修築という難事業をも手がけ、非難攻撃を浴びる結果となった」。(山田一郎「兼山伝説」『南風帖』。高知新聞社。1983. p. 228～231)。

山田氏はまた、その知事に岩礁の破壊を建言したという「机の上の学問しか知らないいわゆる技師」が、「千種」という人であることも、同じ文で明らかにしている(これらの情報の典拠資料は示していない)。

寅彦随筆の理解に資するために、岩波文庫版『寺田寅彦随筆集』や新書版『寺田寅彦全集』(岩波書店)の巻末には、本文と連動した註が記されている。しかし本稿で取り上げた箇所には註はない。

それにつけても私の見るところ、『寺田寅彦随筆集』の註の付け方(項目の選定と記述の精粗)には大変むらがあるように思われる。この作品を収めた第4巻の人名に限ってみても、そう思わずにはいられない。『自然界の縞模様』『科学と文学』など〈科学の味〉の勝った作品を多く収録している事を反映して、科学者の名前が数多く採られ註記されている。結構なことである。これは科学者ではないが、「F画伯」が「藤島武二であるらしい」としたり、「I R氏」が「十五世市村羽左衛門の本名市村禄太郎であろう」—などとかなり踏み込んだ考証的な記述もある。それもまた結構である。

だがそこまで深入りするつもりなら、せめて比較的容易に調査出来たはずの「野中兼山」や「広井勇」も採りあげるべきではなかったか。さらにまた、「大学紀要に出した論文」や「このときの知事」も無視せず、もし判らなくても註記する項目としては採りあげ、〈審らかにせず〉とでも記しておくべきではなかろうか。後世の読者は、そのことに注目し、いつの日にか解明することになるだろう。

■謝辞. 文献調査は、東北大学附属図書館医学分館で行った。広井論文のタイトルの和訳は、海岸工学がご専門の東北工業大学教授 高橋敏彦先生にご教示いただいた。記して謝意を表します。